

大人が絵本を 第4回 いいぞ！がん



司書・読書アドバイザー 安藤 宣子*
小児歯科医師 濱野 良彦**

* 絵本と図鑑の親子ライブラリー ビブリオキッズ(福岡市)
** 医療法人元気が湧く 理事ファウンダー

○短いオノマトペの大きな力

オノマトペ絵本を多数出版している谷川俊太郎氏は、著書のオノマトペ絵本の人気について、「大人たちの頼る『意味』の世界に対して、意味以前の『存在』の手ざわりを絵と言葉を通して表現しているのではないかと自ら分析しています¹⁾。詩人の谷川氏が、言葉を自在に操って日本語オノマトペを生み出し、絵本を創出し続けているのです。オノマトペ絵本界の位置づけがおわかりいただけると思います。

日本語は「ア、イ、ウ、エ、オの5つの母音しかなく、音節が全部で112しかない²⁾ことより、「ゲラゲラ」「ニコニコ」「クスクス」のように「二音節反復型のオノマトペ³⁾が異常に発達した言語³⁾です。英語では「laugh」(笑う)だけでなく「sneer」「grin」等々、「笑う」という意味の単語をたくさん持ち⁴⁾、擬態語を使わずに言葉そのもので笑いの程度を示すことが多いようです。英語の擬態語は200～300くらいで、日本語はその5倍以上あると言われています⁵⁾。

田森育啓氏は「典型的なオノマトペは出来事全体を描写するので、それ自体、非常にヴィヴィッドな描写力を持っている。」と解説し、「ぐつぐつ」「くるくる」というように「言語音を利用して現実の音・声・動作などを模倣して作られた言葉なので、普通の言葉と違い、オノマトペに含まれている音と意味の関係はより密接である」と言います⁶⁾。だからこそ、オノマトペを聞いただけでそれがどんな事柄を表わしているか容易にイメージでき、まだ言葉を理解できない乳児がオノマトペの音によって感覚に刺激を

受け、言葉の意味を知る大人と共鳴することができるのです。

生後2か月齢の乳児親子のお話をしましょう。わらべ歌絵本『ととけっこう よがあげた』(こぐま社)の絵を見せながら司書が「ととけっこう よがあげた ひよこちゃん おきてきな」と歌い始めると、お母様は赤ちゃんを抱いたままリズムを取ります。ページをめくると「びよびよびよ おはよう」の文字と、動き出すひよこの絵が目飛び込みます。絵本の文字どおりに読んだだけでは乳児は反応を示しませんが、2回目の「びよびよびよ」を発した段階で表情が変わり、3回、4回と繰り返し読みをするうちに足を伸縮させるのです。「びよびよ」を繰り返している間は、この反応です。猫の「にゃーん」も、ぶたの「ぶうぶう」も同じで、活字通りの一語を発しただけでは反応しませんが、繰り返すことによって足をバタバタさせながら笑っているようです。



小林衛己子 案、真鳥節子 絵(こぐま社)

乳児の感覚を刺激するオノマトペは、繰り返すことで感覚へ伝達され、感じたままの喜びを全身で表現します。初対面の大人が発する絵本の言葉によって、2か月齢の乳児が前述のように大きな反応を示すことは稀ですが、全くないわけではないのです。反応を示さなくても、乳児の感覚に届いているのです。これが「絵本は新生児から」とする理由です。もちろん、胎児期からの読み語りスタートなのですが…。

*1 オノマトペは、フランス語の onomatopée から借用した外来語であり、英語では onomatopoeia という。いずれも「命名する」というギリシャ語 onomatopoiia (onoma 'name' + poiein 'to make') に由来する。

手にするときは！ ばれ！オノマトペ Part 2

企画 濱野 良彦
構成 木須 信生 ※※※

※※※ 絵本と図鑑の親子ライブラリー ビブリオキッズ
(福岡市)

○胎児への読み語りが大切なわけ

在胎35週で胎児の聴力が発達するのですが、胎内環境の物理的特性より外界で耳にするような音は伝わっておらず、胎児が始終聞いている声は「お母さんの声」です⁷⁾。また、出生後の知覚に効果をもたらすのは通常の出産の5週前からです。重要なことは、既に定説化されている生後の子どものコミュニケーションに意味ある胎内環境音とは、母親の発する声に限定されるという考えなのです⁸⁾。しかし、妊娠8か月未満であっても、胎児とコミュニケーションを図ったり、胎内環境を整えたり、あるいは妊婦であるお母様自身の精神衛生状態を良好に保ったりするうえで、読み語りは効果があると考えられています。

○乳児の情緒的発達に効果をもたらす刺激

比較行動学者の正高信男氏は、「赤ちゃんが外界とコミュニケーションを図ろうとする際、周囲から入力される情報は最初、メロディーとしてやってくる」、そして「生まれた直後に、自分にとって母語となるべき音の体系へ選択的に注意を仕向けられるような心的メカニズムが、すでに遺伝的に備え付けられていて、(中略)それは、メロディーにのせられた歌への関心にはかならない。ついで、興味は『おはなし』へと向いていく」と、実験研究により明らかにしています。つまり、「童謡も童話も、子どもからの欲求に裏付けられた産物である」と結論づけているのです⁸⁾。

生まれつきメロディーに反応する乳児が、音楽的でリズムミカルなオノマトペに反応を示すのは必然的なことであり、「メロディー」と「お話」の中間にあるオノマトペは、新生児・乳児の発達に必要なもので、オノマトペ絵本は、必須アイテムであるということです。童謡を歌ってあげることと同じくらいオノマトペを聴かせてあげて、乳児の感

覚をどんどん刺激することは発育に適したことなのです。

乳児は、生後2、3カ月になると人の顔を見て微笑む「社会的微笑」ができ、4か月頃になると、声を立てたり大きな口を開けたりして「笑う」ことができるのです。この笑いは、抱き上げるなどの身体刺激や、リズムのある声を聴かせるなどの聴覚的刺激によって引き起こされることが多いようです⁸⁾。

前回の「オノマトペ Part 1」で、オノマトペ絵本と3～5か月齢の乳児との関係を事例で紹介しましたが、いずれも乳児期の情緒の発達段階に適した反応なのです。リズムミカルな擬音語・擬態語による聴覚的刺激が乳児の感覚を刺激して、「笑い」を引き起こしているのです。はじめに紹介した2か月児の反応は、家庭で8歳と3歳のお姉ちゃんに毎日あやしてもらうなど、たくさんの刺激を受け続けたことで「笑い」の発達が早くに起こり、「笑った」ように見えたと言えるでしょう。

○ニコニコキャッキョ、赤ちゃんとオノマトペ絵本

前号で取り上げた絵本を中心に、3～6か月児の感覚を刺激するオノマトペ絵本をみていきましょう。

ブックスタートの定番である『ごぶごぶ こほこほ』(福音館書店)は、視覚と聴覚的刺激双方によって、乳児が絵本の楽しみを知ることができる、はじめの一冊です。雨の音を巧みに表現した『ぴつつんつん』(くもん出版)は、擬音語・擬態語を研究している後路好章氏が構成に当たった絵本です。終始「つんつん ぴつつんつん」と軽妙なオノマトペでさまざまな雨の音を表現した本書は、絵の効力と合わせて大人も思わずにこやかになります。絵は、原色や太い実線ではありませんが、モノクロから色が発生していき、カラフルな色がどんどん増えていく構成となっており、視力が0.2くらいまで達した6か月児には、視覚と聴

覚で楽しめます。視力が未発達で3～5か月齢の乳児にも耳からの音だけで満足いく刺激を受けることができます。梅雨時期には、実際の雨の音を聞きながらリズム遊びが楽しめる一冊です。

表紙から本文、裏表紙に至るまで、すべて黒の背景にふみきりの絵、そしてふみきりの音で構成される『かんかんかん』（福音館書店）は、5～6か月くらいの男児が必ず気に入る絵本です。男児は乗りものの音の響きに敏感に反応するので、「かんかんかん」の踏切の音に続いて、列車に乗ってやってきたものたちをオノマトペで愉快地表現したこの絵本は、1～2歳児が自ら選ぶ絵本でもあります。

谷川俊太郎作『ぼぱ一ぺ ぼびぱっぷ』（クレヨンハウス）はタイトルでも示すとおり、大人には発音練習のような言葉使いのオノマトペ絵本です。その言葉使いが乳児にとって楽しい響きとなります。乳児、特に月齢が低いほど、オノマトペのなかでも「ぱびおべほ」に強く反応します。本書や『ごぶごぶ ごぼごぼ』『ぴつつんつん』に代表されるような、「ぱびおべほ」を扱った絵本を、私たちは「パピプペポ絵本」と表現しています。オノマトペ絵本はたくさんありますが、視力が未発達で2～3か月児へパピプペポ絵本を特にすすめることで、読みあいデビューのお母様が早く手ごたえを掴む支援に一役かってくれています。

○ウキウキワクワク、幼児とオノマトペ絵本

1歳を過ぎて短いストーリーが読めるようになると同時に、オノマトペとの接し方も発展し、お話の内容を要所で擬音語・擬態語で表現することによって、幼児に臨場感を与えることとなります。それは、子どもにイメージしやすく、描かれた絵がオノマトペによって動き出し、よりお話の世界に入り込めるのです。0歳児のときは、意味を持たないオノマトペでリズム遊びをしていたものが、1歳頃には意味のある世界でオノマトペがイメージをより具象化する役割を持つようになるのです。合わせて、意味を持たない抽象的なことば絵本によって創造力を育むことも見逃せません。

擬態語は、快いリズムを作り出すので、短歌や俳句、詩などの韻文でも重宝されています。また、文学の世界でも宮沢賢治作品やあまみきこ作品に代表されるように、オノマトペを巧妙に用いて独特の世界を創出している物語は、児童文学から大衆文学まで限りありません。

前回の0歳児の事例に続き、1歳児以上の反応を紹介します。

【事例6】Kくん（1歳）

乗りものが大好きなKくんは、乗りもの絵本とアンパンマン絵本が大好き。Kくんが欠かさず読む絵本『でんしゃはうたう』をお母様と読みあい、電車がレールの上を走る音の響き「たたっつつつつ たたっつつつつ どどん」では、キャハハハと声をあげて毎回大笑い。

Kくんは日常生活でもきつと、電車やバスを見て、その音を聞いていると思いますが、お母様から発せられる電車の擬音語と実際の電車がリンクし、軽快なリズムを心地よく感じているから、「笑い」として表出されるのだと思われます。

【事例7】Yくん（3歳）

秋のおはなし会で、はじめのお話『もみじちゃんとチュウ』で繰り返される「パラッパパラッパ」のフレーズを、3回目くらいから読み手と一緒に口にするYくん。耳からの感覚に響いたようで、他の4冊を読む間も、「パラッパパラッパ」と口ずさみ、帰り際もバイバイではなく「パラッパパラッパ」でさようなら。

もみじちゃんが出会った生きものたちにチュウをしていくお話で、「チュウ」も擬音語です。読み手は、お話全般を通常の語り口調で読み、「パラッパ」のオノマトペだけをリズムカルに読むという演出をしたので、余計に幼児の感覚に響いたと思われます。

【事例8】他の医院のおはなし会で（2～4歳）

『もみじちゃんとチュウ』ではなく、おしまいのお話『だんごむしのダディ ダンダン』に対する反応大。だんごむしが逃げ走る様を表現した擬態語を読み手が軽快に読むことで、子どもたちは身を乗り出して聴き入る。「しゃかしゃかしゃかしゃか」「ころんころんころんころん」などのオノマトペはお母様にも好評で、子どもと一緒に満面の笑顔で聴き入る。

おはなし会終了後は、お母様から本書を見せてほしいとのリクエストと、「絵を音で表現していてすごいと思った」との記述感想がありました。子どもから大人までが楽しめる、それがオノマトペの力です。

○広がれ羽ばたけ、日本語オノマトペ

日本語オノマトペは、日本語の「貧弱な音節を補う意味で、日本人同士でないと理解し合えない微妙なニュアンスの言葉を作り出し、最小の音節で最大の効果を出そうとするので、豊かな感性と想像力が必要となってくる。」と田森育啓氏は解説しています⁶⁾。日本語オノマトペは大人と子どもが共有できる言葉で、子どもから大人へと感性を育む力となります。

乳幼児の歌唱音声の発達研究を牽引する志村洋子氏は、「あかちゃんは普通の話しかけよりもマザリーズ^{※2}に敏感に反応する。とくに、抑揚が大きい言葉に強い興味を示す」として「歌いかけ」をすすめ、「抑揚をつけてゆったり話しかけるマザリーズはとても豊かなメロディーを持っている」と言います⁹⁾。この論理にオノマトペが当てはまるのです。「歌いかけ」同様、「お話」未満のオノマトペをリズムよく語ってあげることで、乳児は心地よい振動を受けることになるのです。

絵本に使われたオノマトペは、お母様、お父様が発するオノマトペによって乳児の感覚を刺激し、表情と身体を全身を駆使して喜びを表現することで、コミュニケーションを図ります。その交流によって親子の信頼関係も深まるのです。また幼児は、オノマトペによって絵に動きを引き起こし、新しい意味を持つ世界へと入っていき、容易に物語世界へ誘われ、体験や活動の場を広めて、感じ考え伝える行為へとつながっていくことになるのです。

すばらしい言語文化を持った私たち日本人は、その日本語のオノマトペを積極的に生活に取り入れていることに気

※2 1970年代アメリカで提唱されはじめたMother's Mothereseで“母親の母親語”。お母様から赤ちゃんへの独特な言葉がけの総称で身体や言葉の成長まで促すと言われています。

付いていないようです。絵本に多用されるオノマトペを乳幼児とのコミュニケーションに活用し、子どもたちの感覚を刺激しながら信頼関係を深めるツールとしての役割も発揮させていきましょう。

文献

- 1) 谷川俊太郎, 中川素子: 子どもにとって おとなにとって 絵本とは?, 別冊太陽; 日本のこころ No.126: 6-14, 2003
- 2) 金田一春彦: 日本語. 上 (岩波新書), 岩波書店, 1949, pp.89-112
- 3) 得猪外明: へんな言葉の通になる; 豊かな日本語オノマトペの世界 (祥伝社新書), 祥伝社, 東京, 2007, pp.14-18
- 4) 吉田智行: 日本語は世界一むずかしいことば? (ことばの探検 I), アリス館, 東京, 1997, pp.115-120
- 5) 同上3): pp.115-116
- 6) 田守育啓: オノマトペ 擬音・擬態語をたのしむ, 岩波書店, 東京, 2002, pp.4-23
- 7) 志村洋子: 赤ちゃんの「声」の不思議を探って (埼玉大学研究者たちの素顔06), 埼玉大学研究機構HP <http://www.saitama-u.ac.jp/iron/keyaki/keyaki3>
- 8) 正高信男: 乳児はことばをからだで覚える, 朝倉書店, 東京, 2011, pp.1-62
- 9) 志村洋子: 歌は、言葉を育てるマザリーズ, 歌と絵本が育てるあかちゃんの脳とことば (edu コミュニケーション MOOK): 14-17, 2012

絵本

- 1) 小林衛己子 案, 真島節子 絵: ととけっこう よがあげた, こぐま社, 東京, 2005
- 2) 駒形克己: ごぶごぶ ごぼごぼ, 福音館書店, 東京, 1997
- 3) もろかおり 絵, 後路好章 構成: ぴつつんつん, くもん出版, 東京, 2009
- 4) のむらさやか: かんかんかん, 福音館書店, 東京, 2010
- 5) 谷川俊太郎: ぼぼーべ ぼびぼっふ, クレヨンハウス, 東京, 2009
- 6) 三宮麻由子 文, みねおみつ 絵: でんしゃはうたう, 福音館書店, 東京, 2010
- 7) 村上康成: もみじちゃんとチュウ, ひかりのくに, 東京, 2010
- 8) どいかや: チリとチリリ, アリス館, 東京, 2001
- 9) おのりえん 作, 沢野ひとし 絵: だんごむしのダディダンダン, 福音館書店, 東京, 2010